



日本近代文学大系 51

# 近代社會主義文學集

解説 小田切秀雄  
注釈 佐藤勝  
祖父江昭二  
国岡彬一  
藤多佐太夫  
森山重雄



角川書店

日本近代文学大系 全60巻

第51巻 近代社会主義文学集

昭和46年9月10日 初版発行

初  
版  
集



別巻引換券

別巻引換券は最終回配本まで  
保存しておいて下さい。

注釈者代表 佐藤 勝

発行者 角川 源 義

印刷者 中 村 武

製本者 鈴木 俊 一

発行所 株式会社 かど かわ しよ てん  
角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3  
電話東京 (265) 7111 <大代表>  
振替東京 195208  
郵便番号 102

落丁・乱丁本はお取替えいたします

信教印刷・鈴木製本

0393-572051-0946(0)

# 目次

## 凡例

五

## 近代社会主義文学集解説

小田切 秀雄

七

## 近代社会主義文学集注釈

荒畑寒村

艦底

光を掲ぐる者

佐藤 勝 翌

宮嶋資夫

坑夫

佐藤 勝 空

平沢計七

工場法

祖父江 昭二 一兎

沖野岩三郎

宿命(抄)

国岡 彬 一 八五

宮地嘉六

放浪者富蔵

祖父江 昭二 三三

新井紀一

坑夫の夢

国岡 彬一 二九

秋田雨雀

国境の夜

祖父江 昭二 三〇

尾崎士郎

獄室の暗影

藤多 佐太夫 三九

金子洋文

地獄

藤多 佐太夫 三五

大杉 栄

自叙伝(抄)

森山 重雄 四二

補注

四三

参考文献

四六

作者略伝

四七

## 凡例

一、本書には、荒畑寒村「艦底」「光を掲ぐる者」、宮嶋資夫「坑夫」、沖野岩三郎「宿命」、宮地嘉六「放浪者富蔵」、新井紀一「坑夫の夢」、尾崎士郎「獄室の暗影」、金子洋文「地獄」、小説八篇、平沢計七「工場法」、秋田雨雀「国境の夜」、の戯曲二篇、それに大杉栄「自叙伝」、計一篇を、発表年代順に収めた。ただし、このうち「宿命」「自叙伝」に限って、紙数の都合上抄録にとどめた。また「光を掲ぐる者」は、著者の同じ「艦底」に直続するよう配列した。

一、本書に収めた本文の底本には、諸本のうち、初出または作者の表現意図に最も沿ったものを採用することを方針とした。その底本と校合した異本とはそれぞれ左記の通りである。

○「艦底」「光を掲ぐる者」は、それぞれ「近代思想」(大1・12)、「前衛」(大11・4)の初出を底本とし、東雲堂書店刊「光を掲ぐる者」を参照した。

○「坑夫」は、近代思想社刊の同名初版本を底本とし、聚英閣刊『恨みなき殺人』、平凡社刊『新興文学全集』第三巻および宮嶋秀氏所蔵の初稿「坑夫の死」ならびに「坑夫」原稿を参照した。

○「工場法」は、海外植民学校出版部刊『創作・労働問題』を底本とし、「労働及産業」(大5・6)の初出を参照した。

○「宿命」は、福永書店刊の同名初版本を底本とし、同改版本、「大阪朝日新聞」(大7・9・6—11・22)の初出および

国会図書館蔵の初版原稿を参照した。

○「放浪者富蔵」は、新潮社刊の同名初版本を底本とし、「解放」(大9・1)の初出および平凡社刊『新興文学全集』第五巻を参照した。

○「坑夫の夢」は、「黒煙」(大9・1)の初出を底本とした。

○「国境の夜」は、叢文閣刊の同名初版本を底本とし、「新小説」(大9・10)の初出を参照した。

○「獄室の暗影」は、「改造」(大11・3)の初出を底本とし、春陽堂刊『獄中より』、雪華社刊『大逆事件』を参照した。

○「地獄」は、「解放」(大13・3)の初出を底本とし、自然社刊の同名初版本、金星堂刊『鷗』および平凡社刊『新興文



『学全集』第四巻を参照した。

。「自叙伝」は、改造社刊の同名初版本を底本とし、同社版『現代日本文学全集39・社会文学集』(昭5・9)を参照した。一、校合にあたっては、右の方針に従い、異本ならびに原稿を参照しつつ、明らかな誤記・誤植は修正し、漢字を正漢字に統一したほか、確実におこしうる伏字を復原するなど、最も信頼しうる本文を提供するよう心がけた。したがって、これは右一篇についてはじめての本文確定である。なおそのさい、かなづかいは、当該注に特記した整合上の例外一、二をのぞき、文法上は一見誤記と思われるものでも、作者の慣用を尊重する立場をとり、底本の表記をいかすようにつとめた。

一、前項のほかは、かなづかひ、漢字、段落、句読点、符号の用いかなど、すべて右の底本に従った。またルビについても、底本に忠実に従い、読者の便宜のために底本にないルビを新たに付する際は、( )で囲んで、それが注釈者の判断によつてふられたルビであることを示した。なお、この場合のルビの表記も、本文に従い旧かなづかひによつた。

一、注釈は、見開き二ページごとに本文の部分に一、二、三……の番号を付し、それぞれについての頭注を各ページ上部に収めた。また頭注で十分に注しえないものについては↓印で示し、補注で詳述した。この補注の番号は一通しとした。

一、注釈の表記は、新字新かなづかひにより、難読漢字の読みは( )にいれて、その語の下においた。ただし、引用文のかなづかひは原文どおりとした。

一、注釈内容は、先行研究の成果をとりいれつつ、作品の主題、文体、語法、発想、構成、素材、風俗史的事実に関わる事項注、および作者の経験的事実、大正期社会主義文学の展望、時代背景などに重点をおき、必要最小限の語釈を加えた。また原則として、頭注は、表現に密着しながら作品を客観的に鑑賞していくことを旨とし、補注は、作品の特質や成立事情、素材の考証、先行研究の紹介と検討などを通じて作品をさらに深く読解していくための作品論を展開することを主とした。

一、注釈中の数字は、引用文を除き、「十二」「二百三」とはせず、「一二」「二〇三」のように記した。ただし、年号などを( )の中に入れる場合は、洋数字により(明26・7)(大15・10)のように示した。なおその際、明治以降の年号に限って、それぞれ明、大、昭と略記した。

一、注釈で各種文献に言及する場合、単行本は『』、新聞・雑誌、および作品名・論文名などは「」で示して区別した。

一、巻末に参考文献、作者略伝を掲げ、鑑賞・研究の利用に供した。

# 解 說

## 近代社会主義文学集解説

小田切秀雄

### この巻の特色

荒畑寒村をはじめとする一〇名の作品を収めたこの巻を、「近代社会主義文学集」と題することには、多少の説明が必要になる。「坑夫」の宮嶋資夫や「放浪者富蔵」の宮地嘉六を「社会主義者」と断ずることは必ずしも妥当でないし、「宿命」の沖野岩三郎はキリスト教の牧師である。牧師の社会主義者がいってもいっこうさしつかえはないが、沖野を社会主義者ときめてしまうことはできない。尾崎士郎についても、またべつの問題がある。荒畑寒村・大杉栄の場合は、文学上の活動においてはアナキズムの思想と情念とに深くあいかかわっていて、厳密な意味での社会主義とはまたちがうところがある。これらの個々の事情については、あとでそれぞれのひととその作品について解説するところでのべるが、とにかく、これらのひとの作品を一括して「社会主義文学」とよぶことには、多少の問題がふくまれているのである。そこで、宮嶋資夫・宮地嘉六・平沢計七・新井紀一らの作品については、「労働文学」という歴史的な称呼で概括し、沖野岩三郎や秋田雨雀や尾崎士郎らについては「革命的知識人の文学」という称呼でまとめ、荒畑寒村・大杉栄のは「アナキズムの文学」のなかに位置づけ、金子洋文のは「プロレタリア文学」の初期に属するとする、というような分類法が当然存在しうるし、現にそれに近い分類の仕方をとっている文学史書もある。そしてそれは、それなりに文学史的な事実と諸動向の性質に即してもいるのである。しかしこのように細分してしまうと、この一〇名の作品の全体を通じて生動しているところの、大正期の人民的・

革命的な文学動向、その関心、素材のえらび方、主人公たちへの共感の性質、追及の方向、思想的な緊張感と社会的な視野、等々が、個々の資質や方向を異にしつつも全体として一つのまったく新しい質の文学の力強い時代的な胎動を示しはじめていた、という文学史的新状況の特色があいまいになってしまふ。

これらの諸作は、大正期のあいだにいついで登場してきて、昭和初年のプロレタリア文学とその運動との高揚をあらゆる面から準備したものであり、同時に、昭和のプロレタリア文学がその高揚の過程でとり落とし、ついに生かすことをなしえなかつた側面をもふくんでいるのである。また、これらの諸作は後述のような社会状況のなかから、それを独自に受けとめ発展させるものとして現われてきたもので、社会状況との関係という点でも共通しているところがあり、さらに同じ社会状況のなかから生じてきた大正文学全体の特色とも深い関係をもっている。この巻の諸家と直接にはなんの関係もないような、大正文学の代表的な諸傾向の作家たちも、実は同じ時代の空気のなかで生きていたのであって、個々にはこの巻の諸家と共通の時代的特色を示している場合がある。また、この巻の諸家によってひらかれたような思想的また文学的な視野や関心が存在しうるということ、個性の自由やそれを拘束するものにはたいする自分なりの対立やせめぎあいをもしもつきつめてゆくなら、下積みの民衆と革命的な知識人においてのそれとどこかであい通じてくるかもしれないということ、さらに、当時の検閲下でどのようなところまで表現の自由と可能性があるかということ、等は大作家の全体にとつて多かれ少なかれ切実な問題であった。以上すべての意味において、これらの作家は大正文学のたんなる片隅の存在でなく、また一つの傍流として添えものふうには扱われるにふさわしいものではない。以前にはそういう扱いがされてきたが、第二次大戦後になってようやくそれが不当であることが、「光を掲ぐる者」・「坑夫」・「宿命」・「放浪者富蔵」・「工場法」等々の文学的にすぐれた作品の再発見・再評価と、それに対応する文学理論上また文学史観上の前進によって明らかにされてきているのである。

このような一群の作品を、なんとという名称で概括したらいいか。昭和三〇年にわたしたちは『日本プロレタリア文学大系』全九巻（三一書房刊）を編んだが、そのときわたしたちとしては、大正末年―昭和初年の「プロレタリア文学」をそれだけ歴史的に孤立したものと見なすことに反対して（プロレタリア文学運動のさかんだった当時には、むしろ自己を絶対化するために孤立的にとらえることが主張されていたのだが）、「プロレタリア文学」を名のるはるか以前の自覚的な人民的・革命的な文学のいっさいについてその主要作を収めることにし、また「プロレタリア文学」の運動がつぶされ、そういう名称じたい

が禁句になった戦争下になお、屈折した形でおし進められ部分的に成熟もしたところの、その思想的・文学的潮流に根ざすものをも、あわせて収録することにした。さらに、直接にはそのどれにも属さぬが、権力がわとその秩序にたいする批判や対立に進み出たすべての作家と作品を収めたいと考えた（ただし、このほうは明治期以外についてはスペースその他で不可能になったが）。つまり、「プロレタリア文学」という概念を、わたしたちは大正末年―昭和初年の一時期に現われた文学とその運動とにかかわる特定の歴史的な概念と規定し、明治らしいの人民的・革命的文学の流れの急激な高揚と発展とをつくりだした一時期だけに妥当するものとしたのである。それでは、まだ「プロレタリア文学」という名称すらなく、その明瞭な共産主義的な革命文学としての実質もまだ現われていなかった大正期のこれらの人民的・革命的な文学をなんとという名称で概括するかということになり、結局のところ、「社会主義文学」という概念をもってすることになったのであった。そこで『日本プロレタリア文学大系』の序巻（明治中期から大正四年ごろまで）を「日本プロレタリア文学の母胎と生誕」の巻とし、同第一巻（大正五年から一二年まで）を「運動擡頭の時代――社会主義文学から『種蒔く人』廃刊まで」の巻としたのであった。このような規定にはまだあいまいなところがあり、大系全体を『日本プロレタリア文学大系』という名称にしたことにひきずられた面もあるが、大正期のを「社会主義文学」と概括することはここに一つの出発をみたのである。

それまでも、宮嶋賢夫・宮地嘉六・新井紀一らは「労働文学」の作家とよばれ、荒畑寒村や大杉栄がアナキズム文学の作家と見られていたことは事実だが、明治らしい敗戦時までにはいたる文学史的な脈絡のなかに、人民的・革命的文学の大正期の諸動向を包括するものとして「社会主義文学」という概念を自覚的におしだしたのは、そのときいろいろのことだったと思う。ただし、明治期の三〇年代に、徳富蘆花・木下尚江を中心とする「社会主義小説」の流れがあることは古くから注目されており（それは戦後に発掘された一群の「明治社会主義詩人グループ」――まだ仮称。もっと適切な名称をさがしているところだ――の活動および社会主義的な評論・ルポルターージュをあわせて、「明治社会主義文学」を形成している）、したがって社会主義文学という概念は明治期にまでさかのぼるものであり、さらにいえば、大正末年―昭和初年のプロレタリア文学も広い意味では社会主義文学に属するものであることはいうまでもなく、戦後の文学においてもその立場による作家と作品とがあるので、一時期の文学に冠する歴史的な名称としては社会主義文学という概念は適切でない、という批判をも免れがたい。

しかしながら、戦後の現在、社会主義という概念はすでにあまりに一般的なものになりすぎていて、その成立いろいろの本

質に立ちかえつてあらためて問うというような場合を除けば、この概念はきわめて抽象的な、どうにでも勝手に解釈されるようなものとなっている。文学的にも、広義の二〇世紀文学は、近代主義的な自我の文学と社会主義の文学との、二つの方向に大きくわかれていて、というふうな大局的にとらえていう場合以外には、特定の作家または作品に社会主義文学・社会主義作家という名称を使うことは少ない。また、大正末年―昭和初年のプロレタリア文学は、広い意味ではたしかに社会主義の立場に立った文学であることにまちがいはないが、社会主義一般というのではなくて、日本のプロレタリア作家同盟が国際革命作家同盟の日本支部であり、国際的に展開されていた共産主義運動の一翼としての、プロレタリア革命をめざす文学運動として展開されたのであったから、これを社会主義文学と規定することは検討の手續き上においてしか意味をもちえないのである。そこで、残るのは「明治社会主義文学」との関係ということになるが、明治期のそれはその時代なりの特色をもっている。たとえば、徳富蘆花が『黒潮』初刊本にそえた文章でみずから社会主義者として宣言していることが、この作品の反藩閥・反専制のラジカルな民主主義とどのような内的経過でつながっているのか、また木下尚江においての、「火の柱」でのキリスト教社会主義と、次の「良人の自白」での共産農場の夢と幻滅とが、どのようにかかわりあっているのか、とか、その他思想的に未分化の時代の多くの問題がふくまれており、一言でいえば、明治期の初期社会主義のもつていた雑然たる性質のうちのいくつかの面と明治社会主義文学とはわかちがたく結びついており、それは大正期においての結びつきとはずいぶんちがっている。そこで、明治期のは、さしあたり「明治社会主義文学」という名称で概括して、大正期の社会主義文学と区別する――こういうやり方をわたしたち（あるいは、わたし）はとつたのであった。

大正期のこの一〇名の作家だけについても、個々には、大正期「労働文学」の作家であったり、またはアナキズム文学潮流の作家であったり、あるいは革命的な知識人の文学に属するひとたちを、どうして「社会主義文学」の作家という名称で概括するかといえ、右に述べてきたような歴史的な文脈からも知られるように、広い意味での社会主義の思想とその社会的な動向に刺激され、支えられ、またそれを進んで受けとめて、自己の問題として個性的に追及する文学動向が、大正期に新たな文学的活気をもって多面的に展開しはじめたからであり、文学的思考や感受性のなかに支配権力の体制とその秩序とにたいする自覚的なたたかいたいということががしみ通り、しかもそれは実社会において具体的に展開しているたたかいにどれほどかのていどにおいて結びついている、ということによつていられる。広い意味ではアナキズムも社会主義の一部であり

（大正初期にはアナキズムのほうが社会主義の思想と運動の最前線に立ち、推進の役割をはたしていた。大杉栄・荒畑寒村の雑誌「近代思想」の思想的・政治的な意義はそういうところにあった）、アナキズムと共産主義とはっきりとわかれてはっきり対立するようになったのは、ようやく大正一〇年代に入ってからであり、いわゆる「アナ・ボル論争」がやがて文学面での両者の決定的な分離にいたるのは大正一五年末の日本プロレタリア文芸連盟の分裂においてであって、これを逆にいえば、それ以前においてはアナキズム系、社会主義・共産主義系をふくめて文学上では、社会主義文学という概括にふさわしい未分化の状態があり、また、かつて徳富蘆花が自己を社会主義者と宣言した例もあるように、日本ではラジカルな体制批判、つまり革命的な立場は明治中期からは社会主義以外になかったために、革命的な知識人と社会主義とは直接間接の結びつき、ないし、親近、ないし刺激しあう関係があり、すべてこれらの事情からしても、個々の諸傾向をふくむ大正期の「社会主義文学」という概括が意味をもつのである。

大正期の日本に開かれた新たな社会的・思想的状況——これはこの巻の作家と作品を考えるさいとくに重要なことに属する——や、これらの作家をとりまく大正期の文学の一般的な状況やその特質については、以下に収録作品の個々の作家について述べるなかで、時にその個人をこえて一般的な叙述に及ぶというやり方でとり上げてゆくことにする。

### 荒畑寒村

周知のように、荒畑寒村は作家であるよりも革命家であり、まさにその生涯を革命家として貫いてきているひとである。高齢に達したいまなお元気で、権力との直接の対抗の最前線にある新左翼や社会党の左翼に、種々の仕方での協力を行なっており、また彼らからだけでなく実に広汎なひとびとから深く尊敬されている。日本社会主義運動の文字通りの長老であり、途中で転向するひとが多かったなかで彼はまったく長老の名にふさわしい生涯をおくってきているひとである。その寒村が、一時期ではあるが小説を書き、彼自身のけんそんにかかわらず、それらは独自の文学的な達成となり、文学者寒村という側面にたいする評価もようやく一般化しつつあるということは、それじたいとして注目にあたいたい。日本の革命家にはすぐれた文筆家が少なく、幸徳秋水や木下尚江や荒畑・大杉らをべつにすると、こんにちにいるまで革命運動指導者たちに古

典となるような文章を書いた者が実に少なく、レーニンやローザやグラムシやトリアッチや毛沢東やカストロらのように、その文章がまさに現代の古典としてその国の内外で読まれるというようなことはほとんどなかった。荒畑・大杉のように、時代をこえて日本人に読まれるというようなものも、ほとんどないのである。ふつう荒畑寒村の処女作と見なされているのは、彼が二〇歳のときに刊行してただちに発売禁止となった『谷中村滅亡史』（明治四〇年八月、いま新泉社から復刊）であるが、これがきわめてすぐれた告発的な足尾鋳毒ルポルタージュであることはいまでは広く知られており、ことにさいきんの日本での公害問題の緊迫化とともにあらためて熱心な読者をもつようになってきている。この書をつらぬくはげしい社会的なヒューマニズムの純粋な情熱と、それを支える現実把握のまっすぐな強さとは、このルポルタージュをまさに文学的といつていいものになっている。彼は、こういう資質をもった革命家として出発したのである。彼には後年、『寒村自伝』というくわしい自叙伝があり（いまその新版が筑摩書房から上下二冊になって出ている）、これじたいがまた、福沢諭吉の『福翁自伝』や河上肇の『自叙伝』などととも、日本においての自伝文学の代表的な達成になっている。

彼は、明治二〇年（一八八七）八月、横浜の旧士族で遊廓内で仕出し屋のち引手茶屋をやっていた家に生まれ、高等小学卒業後、外国の商館のボーイや海軍造船工廠の見習工などとして働き、また早くからキリスト教にひかれて一五歳のとき受洗した。彼が傾倒していた内村鑑三が、社会主義者の幸徳秋水・堺利彦とともに日露開戦に反対して「万朝報」記者をやめ、幸徳・堺が平民社をつくり反戦運動のための週刊「平民新聞」を発行しはじめたとき、寒村はこれに共感して明治三十七年一月には社会主義協会に入り、同七月横浜平民社（のちの曙会）をつくり、さらに三十八年四月には社会主義出版物をつんだ荷車をひいて「社会主義伝道行商」に旅立つ。社会主義にめざめた若々しい青年としての活動が、こうした経過を通してはじまり、平民社解散ののち一時紀州田辺の「牟婁新報」で働き、帰京して明治四〇年一月から「日刊平民新聞」、同一〇月から「大阪平民新聞」を手伝う。このかんに、谷中村の鋳害ルポルタージュを出版したのである。明治四一年六月山口孤劍出獄歓迎の集会の折に「無政府共産」等の赤旗をかかげてあばれたいわゆる「赤旗事件」で千葉監獄に送られ、四三年二月まで獄中生活をしてきたが、この長い不在のために、同六月に幸徳秋水らのいわゆる大逆事件が権力がわによってでっち上げられたとき、その網の目にかげられることを免れた。しかし、寒村が出獄したとき、田辺にいたところから結ばれていた菅野須賀子がいまだ秋水と関係をもつようになっていることを知り、二人を射殺しようとしてはたさなかった、ということが



ある。また秋水らの事件がでっち上げられ、国家による社会主義者殺しの計画があらわになってきたとき、その最高責任者として桂首相を暗殺しようとはかったがうまくゆかなかったことがあり、寒村の一本気なげしさがこういうことのかなかに現われている。彼は、大逆事件後のはりめぐらされた酷薄な弾圧のなかで、「二六新報」のちに「日本新聞」につとめながら、社会運動冬の時代といわれる凍結をなんとか破り出る方法を手さぐりしていた。入獄していたためやはり助かった堺利彦が、いまは動けぬ、しばらくやりすごして再起の機を待とう、という態度に出たのにたいして、寒村は大杉栄とともに、時機は待っているべきものでなくつくりだすべきものだ、凍結はどこから破り出てゆかねばならぬ、として、さしあたり思想・文学の雑誌を出すというところから新しい打開の試みに進み出た。大正一年一〇月創刊の「近代思想」がそれである。石川啄木が、土岐善麿とともに短歌雑誌の「樹木と果実」という形で社会主義の啓蒙を計画したのは、このしばらく前のことであった。この「樹木と果実」は実現せずに啄木は死んだが、寒村らの「近代思想」が創刊されたのに力づけられて、土岐は啄木の遺志を生かすべく翌大正二年に「生活と芸術」を創刊した。この雑誌は生活派の短歌雑誌でありながら、「近代思想」の僚誌のような性格をもかなり濃厚に示したのであった。

この「近代思想」誌上で、寒村は小説家としての活動をはじめた。赤旗事件の前にもひととき彼は「新声」その他にナイヴな短篇小説を発表しており、もともと文学的な資質はもっていたのだが、大逆事件後の社会をおおった堅氷のもので、もはや自由に社会や政治の論を公表することは不可能にしても、せめて文芸や思想の抽象的な問題を論ずる場を雑誌中心にこしらえて、同志の再起にそなえよう、と考え、寒村が小説と翻訳、大杉が思想・文学の評論を主として書くことになった。寒村にとっては小説は一種の韜晦であり、一時期をしのぐための仮りの仕事のつもりでもあったが、同時にそれは、彼の資質そのもののなかにあった小説的な表現への関心と要求との自由な流露、その実行の試みでもあった。彼は、この雑誌に次々と小説その他を発表し、また土岐の「生活と芸術」やさらには「新潮」等にも書くようになった。この時期の彼の小説は「怠情者」(「近代思想」大正二年一〇月)・「艦底」(同二年二月)・「改宗」(同二年二月)・「或る男の影」(同年九月)・「逃避者」(「生活と芸術」同年同月)・「暴風雨」(「近代思想」同年一〇月)・「冬」(同、三年一月)・「一挿話」(同、同年六月)・「夏」(同、同年九月)等で、これらには内容の上で二つの系列があり、一つはここに収録した「艦底」に見られるような客観小説的なスタイルのもの、もう一つは、私小説ふうのスタイルによって「逃避者」・「冬」等に自分たち追いつめられた社会主義者たちの実状を